

Title	貫之昇風歌の性格と表現 : 水に映った影の歌をめぐって
Author(s)	田島, 智子
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 1989, 23, p. 1-12
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/47865">https://hdl.handle.net/11094/47865</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 貫之屏風歌の性格と表現

—— 水に映った影の歌をめぐる ——

田 島 智 子

## 序

屏風歌は、大和絵屏風に押すべく詠み合わされた歌である。九世紀半ば頃から題画詩に替って詠まれ始め、十世期中おおいに流行、題材や詠法の点で、他の屏風に与えた影響は測り知れないのだが、その後流行は下火になり、復古的な目的で詠まれるくらいになってしまふ。歌合歌や、叙景歌などに吸収されたと考えられている。そうならざるを得なかった屏風歌の性格というものを、表現の面から考察してみたい。本稿では、屏風歌に特徴的に現れる、水に映った景物という趣向の歌を取り上げ、分析しようと思う。

## 一 貫之延喜六年の歌

並み居る屏風歌歌人の中でも、特に紀貫之が好んで、この種の歌を詠んでいることが知られている。<sup>(1)</sup> その私家集

には、五三二首もの屏風歌が残されており、しかも若年から晩年にいたるまで、制作順に配列されているので、分析に格好の対象である。

ふつう貫之の和歌は、延長八年（九三〇）から承平五年（九三五）の土佐赴任を境に前期と後期に分けて考えられている。本稿でもその区分を参考にしつつ、貫之の変遷をたどって行きたい。まず前期の中でも最初期の『延喜六年（九〇六）内裏月次屏風』を取上げると、これには次の三首の、水に映った影の歌が詠まれている。

六月うかひ

①篝火のかけしるければ（西本願寺本「影しうつれば」）うは玉のよかはのそこは水もゝえけり（貫之集一〇〇）

八月こまむかへ

②あふ坂の関のし水にかけみえていまやひくらんもち月の駒（貫之集一四四）

志賀のやまこえ

③人しれすこゆと思ひし足引のやました水にかけは見えつつ（貫之集一七七）

①の「鶉飼の篝火の影が映って夜河は水も燃えている」という歌は、次の古今集読人不知歌、

かがり火の影となる身のわびしきは流れてしたにもゆるなりけり（古今集恋一 五二九 読人不知）

を本歌としている。また、『三月三日紀師匠曲水宴和歌』での経験も生かされているかもしれない。昌泰年間（八

九八一九〇一)の成立かと推定され、従来ならば漢詩が詠まれた中国伝来の行事に、和歌を詠んでいることで注目されているのだが、この時「灯縣水際明」題で貫之は次のように詠んでいる。<sup>(3)</sup>

篝火のうへしたわかぬ春のよは水ならぬみもさやけかりけり

「水の上にも下にも篝火があり、水でない我が身も明るい」の意で、やはり水に映る篝火を詠んでいる。

②の歌の駒迎とは、諸国から献せられた馬を逢坂の関まで出迎える八月の行事である。その場面を詠むのに、貫之が、

河津鳴カハツナガ 甘南備カミナヒベ河爾カハニ 陰所見カゲミニテ 今香開良武イマカサクラム 山振乃花ヤマヅキノハナ  
 (万葉集卷八 一四三九 厚見王)

という万葉歌を下敷にしていることは明らかである。また、「あふ坂の関のし水」の背後には、

相坂の関アヒサカにながるニいはし水イハシいはで心ココロに思おもひこそやれコソヤレ (古今集恋一 五三七 読人不知)

という古今集読人不知歌があろう。

③の志賀の山越とは、京都の北白川から如意が峯を通って近江に出る道のことであり、行く先には崇福寺があった。「人知れず越えたと思ったのに、影が見ていた。」と詠んでいる。「人知れず」越えたかったのは、祈願成就のためではないか。たとえば、

三月やまてらにまいる

あし引の山をゆきかひ人しれす思ふこゝろのこともならなん（貫之集一四三）

いなりまうて

春霞立ましりつゝいなり山こゆる思ひの人しれぬかな（貫之集一三三六）

かみのやしろにまうてたる

いかきにもまたいらぬほとは人しれすわか思ふことを神やしらなん（貫之集一四三九）

という屏風歌はいずれも、願は人に知られないことが望ましいという前提で詠まれているからである。また、③に類似する先行歌に、

しがの山ごえにて、いしゐのもとにてものいひける人のわかれけるをりによめる

むすぶてのしづくににごる山の井のあかでも人にわかれぬるかな（古今集離別 四〇四 貫之）

という古今集貫之歌がある。この歌も実は屏風歌かと推測されているのだが、③が「山の井」ではなく「やました水」とした背後には、

葦引の山した水のがぐれてたぎつ心をせきぞかねつる（古今集恋一 四九一 読人不知）

という古今集読人不知歌があるだろう。

以上、延喜六年の貫之最初期の歌を検討してみたところ、本歌もしくは参考歌として、万葉歌と、古今集の中でも古い読人不知歌を指摘することができた。古歌を取入れることによって、水に映る景物を詠みこなそうとしている姿勢が伺える。②と③の歌は、拾遺集に入集し、名歌として高い評価を受けており、その試みは成功したと言えよう。

## 二 延喜六年以後、前期の貫之歌

その後、前期においては、

河のほとりに紅葉あるところ

④水底に影しうつれは紅葉ゝ色もふかくや成まさるらん (『延喜十三年(九一三)尚侍満子四十賀屏風』貫之集一二六)

池のほとりにさける藤のもとに女とものあそひて花のかけを見たる

⑤藤の花色ふかけれやかけみれば池の水さへこむらさきなる (『延喜十六年(九一六)斎院屏風』同一六二)

⑥色のみまさるへらなる磯の松かけみる水もみとりなりけり (『延喜十七年(九一七)屏風』同一七五)  
むめの花のさけるところ

⑦梅の花またちらねとも行水のそこらうつれる影そ見えける (『延喜十年(九一八)承香殿女御屏風』同一二

という四首を、特徴的な歌として挙げる事ができる。④は「水底に影が映るので、紅葉の色が深まったことだろう」、⑤は「藤の花の色が深いので、池水が紫に染った」、⑥は「色がまさったのだから、松の下の水が緑である」と、いずれも水に影が映るのは景物の色が染まった故である、という発想で詠まれている。この発想の元は、万葉集の、

能登河之ノトガヘ 水底并尔ミツコソサヘニ 光及尔タルマデニ 三笠乃山者ミカサノヤマハ 咲来鴨サキケルカモ (万葉集卷十 一八六五 作者不詳)

多祐之浦能タコノウラノ 底左倍尔保布ソコサヘニホフ 藤奈美乎フジナミヲ 加射之氏将去カザシツテニカム 不見人之為ミズヒトノタメ (万葉集卷十九 四二二四 大伴家持)

伊気美豆尔イケミズニ 可気左倍见要氏カゲサヘミエテ 佐伎尔保布サキニホフ 安之婢乃波奈乎アシビノハナツ 蘇耳尔古伎礼奈ソヅニコキレナ (万葉集卷二十 四五三六 大伴家持)

などに求められるだろう。一首目「水底が照までに咲く花」、二首目「底まで匂う(ほどに咲いている)藤」、三首目「影が見えるほど咲き匂う馬酔木の花」と、花が咲き誇る様を水に映ることで示している。

また、⑦は、

池のほとりにもみぢのちるをよめる

風ふけばおつるもみぢば水きよみぢらぬかげさへそこに見えつつ (古今集秋下 三〇四 躬恒)

という古今集躬恒歌の、「散っていないのに、影が水底にある」という発想に基づいている。前期においては、万葉歌や同時代の歌人の歌から、言葉ではなく発想を得ることが指摘できよう。しかも、④⑤⑥と、繰返し同じ

発想を用いている。

三 前期末から後期の貫之歌

前期の終り頃から、次のような発想の歌が多くなる。

⑧ 行水の心はきよき物なれとまこととおもはぬ月を見えける〔延喜末（九二二）—延長七年（九二九）屏風〕  
貫之集一（二八九）

⑨ ふたつこぬ春と思へと影みればみなそこにさへ花そちりける〔同〕貫之集一（三〇〇）

⑩ 空にのみみれともあかぬ月影のみなそこにさへ又も有かな〔同〕貫之集一（三一一）  
女とも河のほとりにあそぶ

⑪ 我身又あらしと思へとみなそこにおほつかなきは影にやはあらぬ〔承平七年（九三七）右大臣恒佐屏風〕  
貫之集一（三五八）

女、はなの池のほとりなるたいにむめて水の底を見る

⑫ 月影のみゆるにつけてみなそこをあまつ空とや思ひまとはん〔天慶四年（九四一）右大将実頼屏風〕貫之集一（四五五）

⑬ うつるかけありと思へは〔御所本「おもはずは」〕水底の物とそ見まし款冬の花〔天慶四年（九四一）内裏屏風〕貫之集一（四六五）



⑧「本物とは思えない月が水に見える」、⑨「春は二つ来ないと思うのに、水底にも花が散る」、⑩「空に見ても飽きない月が、水底にもある」、⑪「二人といたはずの自分が、水底にも居る」、⑫「月の映る水底を空と見まがう」、⑬「影だとおもわなければ、山吹を水底の物と誤ってしまふ」という主旨である。⑧⑨⑩は前期の歌だが、いずれも、影を本物と見間違えそうになることから生じる面白さを詠んでいる。同じくこの発想を用いた先行歌に、次の歌がある。

池に月の見えけるをよめる

ふたつなき物と思ひしをみなそこに山のはならでいづる月かげ（古今集雑上 八八一 貫之）

⑨では、「ふたつこぬ」「ふたつなき」と言葉まで類似している。だが、さらにこの発想の元をたどれば、漢詩に行き着く。白楽天に、

嵩山表裏千重雪（和漢朗詠集二四三）  
かうさんへうりせんちようのゆき 洛水高低兩顆珠（和漢朗詠集二四三）  
らくすいかうていりやうくわのたま

という有名な詩句がある。空の月と水底の月を二つながらの珠と詠んでいる。また、本朝でも『文華秀麗集』に、

冷然院各賦一物、得水中影、応製、一首

桑広田

〈前略〉

看花疑有馥 花を看ては馥有らむかと疑ひ

聴葉不鳴風 葉に聴きては風を鳴らさず

一鳥還添鳥 一鳥還鳥を添へ

孤叢更尚叢 孤叢更に叢に向かふ

〈後略〉

という詩がある。漢風全盛期、嵯峨天皇の離宮冷然院で、「水中影」という題を詠んだものである。「水に映った花の影を見ると、香が有るのではないかと疑い、水に映った葉も、本物かと耳を傾けてみるが風音を立てない。一羽の鳥が、水に映ってもう一羽を加え、一つの叢が、水に映って更に叢を添えている。」と、影が現実に関わりなく近いが、本物ではないことから来る違いに、面白さを見出している。

貫之はこのような想を漢詩に得て、古今集以下の和歌を詠んだと考えられるのだが、それを繰返し使っている事が注意される。この時期の目新しい趣向としては、

四月池のほとりの藤の花

水底に影さへふかき藤の花はなの色にやさほはさすらん (『天慶二年(九四〇)内裏屏風』貫之集一四〇五)

という、唐の賈賢の詩句「植穿波底月」に基づいた歌があるくらいである。前期にも、水に影が映るのは景物の色が深まった故である、という同じ発想で三首詠んでいたが、さらにその傾向が強まっている。

ところで、菊地靖彦氏が、やはり貫之の七夕歌と水に映じた影の歌を通覧しておられその結果、「いたずらに旧

套を追」うばかりで「貫之の歌はやはり『古今集』以後、時を経るにしたがつて漸次退潮の傾向がはっきりしている」と評しておられる。<sup>(6)</sup>しかし、この傾向を「退潮」とみなしてよいだろうか。

同じ発想を繰返し用いるのは、他の歌人にも見受けられる傾向である。たとえば、池に映る鶴の影では、

いけみつもいかにすめはかあしたつのとせのかけをそこにみるらん(『天曆三年(九四九)朱雀院屏風』元輔集Ⅲ七七)<sup>(7)</sup>

池辺に鶴たてり

あしたつの千世影すむいけみつは浪さへたてゝのとけかりけり(『天曆十一年(九五七)師輔五十賀』元真集Ⅱ二二)

いけにたつゐたり

あしまわけたつおるいけのみつすみてちとせのかけはうつしつゝみん(『応和元年(九六一)昌子内親王着裳屏風』元輔集Ⅲ八)

いけのほとりに鶴たてり

あしたつのかけのみうかふいけみつはちよにすむへきしるしとそみる(『応和元年(九六一)昌子内親王着裳屏風』順集Ⅰ四六)

と、「水が澄んで、そこに住む鶴の千歳の影が映る」という発想で詠んでいる歌を何首も挙げることができる。同じ発想で繰返し歌っているのは、一人貫之のみではない。屏風歌全体の傾向と言える。

## 結

貫之の歌を中心に、水に映る影という趣向に焦点を当て、屏風歌を分析してきた。貫之歌においては、まず延喜六年月次屏風では、万葉集や古今集読人不知歌等、古歌から言葉を取入れた屏風歌が目立った。それは、確かに意欲的な試みである。しかし、それ故にまた新奇な印象も拭い切れない。その後、前期では万葉集や同時代歌人から得た発想を、前期の末から後期にかけては漢詩から得た発想を用いた歌が、繰返し詠まれていた。

同じ発想でよむことは、否定的に受取られがちであるが、他の歌人にも見られる現象であることを考えると、屏風歌は必ずしも人目を引く新奇な趣向を目指していたとは考えられない。貫之が晩年に近づくにつれ、目新しさのない平明な歌を詠むようになったのは、言葉や趣向の珍しさに寄掛かるよりは、屏風歌としてふさわしかったからではないだろうか。しかし、同じ趣向で詠むことを許容することは、停滞にもつながる。屏風歌が急速にすたれ、復古的な意義しか持たなくなったのも、この辺に一因があったのではないだろうか。

## 注

- (1) 藤岡忠美氏 『紀貫之』（創美社）昭和六十年
- (2) 以下、私家集は『私家集大成』、勅撰集・私撰集は『新編国歌大観』、歌合は『平安朝歌合大成』による。
- (3) 『新編国歌大観』第五卷
- (4) 古今集時代以後、しきりと「底」「水底」と読まれるのは、これらの方葉歌の影響であろう。その後、康保四年（九六四）における源順の屏風歌を先鞭として「水の面」とも詠むようになる。さらに『貞元二年（九七七）三条左大臣頼忠前裁歌合』では、「水上秋月」という題で、しきりに「水の面」と詠まれている。その契機となったのは、応和

元年（九六一）三月五日の冷泉院池亭での花宴に、「花光水上浮」という題が設けられたことではないだろうか。  
 『本朝文粹』卷十に菅原文時の序あり

順がこの題を強く意識していたことは、『本朝文粹』卷十一「暮春於浄園梨洞房賦花光水上浮詩序」から伺える。また、『貞元二年三条左大臣頼忠前栽歌合』の題を設けたのは、応和元年に序を献じた文時である。

(5) 『詩人玉屑』卷十五。『土佐日記』に「さをはうがつ、うみのうへのつきを。」と貫之自身引用している。

(6) 菊地靖彦氏『古今集』以後の貫之』（桜楓社）昭和五十六年二〇頁

(7) 元輔集Ⅲには「天とく三年（九六〇）、すさくゐんの御屏風に」とあるが、朱雀院はそれ以前の天曆六年（九五二）に崩じている。天曆の誤りであろう。

（大学院後期課程学生）